

04・いつてすぐの、連続絶頂あまあま貝合わせセックス

『03・『性処理係ごっこ』しながら授乳ローションクリイキさせてもらう（自作えっち漫画を読まれたので）』からそのまま続き。

とある年の春。四月二十一日、木曜日。十六時すぎ。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は晴れ。室温は二十二度。

昨日より暖かい。

場所は、七緒の自宅、自室。

主人公と七緒、ベッドの上に座り、七緒が上、主人公が下になる形で、貝合わせセックスをしようとしている。

## SE1 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【0―5秒ほどまで流して『七緒』のセリフ。その後、音量が小さくなる】

【室外の音が、室内にかすかに聞こえる】

【トラック終了まで流し続ける】

SE2 七緒が主人公に密着する音

【最初から最後まで流す】

※このトラックは『絶頂ポイント』を迎えるまでずっと『少し苦しそうに、快感をこらえるように』話します。

※ここから『\*マーク』まで、距離がだんだん近づいて行きます。

あまり厳密にはせず『次第に近づいて、密着する』という認識でOKです。

その後もあまり厳密ではなく『基本的に近い距離で会話して、キスするときは近づく』というイメージでOKです。

●正面 30センチ

「【息づかいのみで表現する。  
かなり興奮して。

主人公に跨り、腰を下ろそうとしている」

はっ……ふ♥」

SE3 主人公と七緒の性器が接する音

【最初から最後まで流す】

七緒、仰向けに寝そべった状態の主人公の片足を持つと高く上げ、足と足の間に、自分の身体が入るようにして近づく。

それから、うまくお互いの足が絡み、性器同士が擦れ合う角度を見つけてから……ゆっくりと腰を下ろす。

これによって、距離が近づく。

●正面 15センチ

「低めに、小さく、びくつと喘ぐ。

腰を下ろし、主人公と性器を重ね合わせたので。

まだ性器を重ねただけで、主人公の体温と性器の感触を強く感じる程度である。しかし、それでもとても嬉しく、気持ちいい」

ああ……っ♥

【※6回※ ゆっくりめに、浅く呼吸する。

快感に耐えている。

嬉しさだけでイってしまいそうだが、それはあまりにも早すぎるので」

はー、はー、はー。

はー。はー。はー………♡」

七緒、主人公の下腹部に優しく手を添えると、主人公を優しく見つめる。  
主人公はたまらなくなつて上半身を起こし、キスをねだる。

これによって、距離が近づく。

二人、そのままキスする。

※以後すべて『性処理係』は『せいしより【が】かり』

『係ちゃん』は『【か】かりちゃん』と読んでください。

●正面 0センチ

「【※1回※】キスする。唇に軽く、音を立ててキスする」

ちゅ♡」

\*ここで近づききる。

七緒、会話するために少しだけ離れる。

●正面 3センチ

「「うつとりと幸せそうに」

はあ。先輩のおまんこあったかい……♡

【照れ笑いして予防線を張る。

本当に、その位感じてしまいそうなので」

良（よ）すぎて、おっきい声出ちやうかも。

【嬉しそうに。

しかし、自分の今日の役目を思い出しながら自戒する。

『自分から言い出した以上は、今日はそのキャラクターに徹するべきではないか』という思いがあるので」

でも、今の私は先輩専用の性処理係ちゃんですから。

先輩最優先じゃなきゃね♡」

七緒がくすくすと笑って、当然のように言う。

『やはりそのつもりなのだ』とわかり、主人公は切なくなる。

七緒という女の子は、昔からそうだ。

相手が自分に期待する人物像を読み取っては、それを演じようとする傾向があるのだ。演じている時の七緒もまた、七緒ではあるのだろう。

『かんぺき系優等生』も『小悪魔系後輩』も、彼女の一面ではあるのだろう。

だけど、それらの『期待されている人物像』から七緒の感情がはみ出す時、彼女はこうするのだろう。

主人公が思うに、七緒は今でも、その辺りのバランス調整ができていない。

その結果『望まれていない方の自分』を今でも犠牲にしがちで、その最も悪い例が、交際前の『本音を打ち明けられない秘密主義者』の七緒だったのではないかと、主人公は考えてしまうのだ。

#### SE 4 性器と性器がこすれ合う音1

【最初から最後まで流す】

#### ●正面 3センチ

「低めに、びくっと、うめくように喘ぐ。

少し動いただけで、また気持ちいい所に当たったので」

う……。あ。

【※3回※】とてもゆっくり呼吸する。

必死で快感に耐えている】

はー。はー。

はー……………っ ♡

【少し間をあけてから。

照れ笑いして、なんとか耐えきってから話す。

ゆっくり動かせないと、あつという間にイきそうなので。

しかし、あたかも『そういうコンセプトのセックス』であるかのように言う】

へへ……………ゆっくり動かしますね ♡

ゆっくり。じわーって気持ち良くなりましたよ ♡」

だけど主人公は『愛の力は万能』とか『自分が力を尽くせば、七緒の苦しみを、全部なくす事ができる』なんて思っていない。

もし本当にそうなら、この半年間で七緒に関する問題はすべて解決しているはずだ。

それに、七緒の愛情を一身に受けて暮らしている自分は無敵になって、何かもっと、今よりももっとすさまじいものになっているはずだからだ。

だけど当然、そうはなっていない。

どんなにお互い好きでも助けられない事や関与できない問題はあつし、それが心の事なら、なおさら触れられない事がある。そう思うのだ。

だけど、だからと言って『何もしません』と言うのも違うだろう。自分のできる範囲で、最大限の事をする。それはしていくべきだ。少なくとも主人公は、そう思うのだ。

七緒、腰を動かすために、片手を後ろについて、少し離れる。

## SE5 性器と性器がこすれ合う音2

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【セリフと重ねて流す】

【▲1 一度止まる】

【▲2 で再開する】

【▲3 で速度が一段階早くなる】

【▲4 まで流し続ける】

七緒、そのままの姿勢で、腰を動かし始める。

●正面 30センチ

「※6回※ ゆっくりめに、荒く呼吸する。

だんだん荒くなる。

うつとりとしながらも、快感に耐えている」

はー。はー。はあ……♡

はあ、はあっ。はあ……♡」

〈主人公〉

「……っ♡」

そんな事を考えている間に、主人公の身体には、とろけるような快感がやってきた。

七緒が今、うつとりととろけた目で、だけど自分よりも主人公に気持ちよくなってもらうために、小刻みに腰を振り始めたからだ。

それは近づいては、少し遠くなる。

ふいに密着しては、お互いの弱いところが、何度も何度も擦られ続ける。

我を失うほどに気持ちよく、いつまでもそうしていたいのに、もっと強烈な刺激が欲しくなる。

●正面 30センチ

「低く、うめくような声で喘ぐ。

いきなり気持ちいい所に当たったので。

その上、主人公からそうなるようにしてきたので」  
あ。

「低く、ゆっくりと、じつと耐えるような声で喘ぐ。

語尾が上がる」

ああっ………♡

【照れ笑いして。素で驚きながら。

すでにものすごく気持ちいいので」

すご………♡

良（よ）すぎ………♡

【照れ笑いして。

何とか耐えようとはしたが、早々に『それは難しい』と判断し、素直に打ち明ける」

へへ。濡れすぎてて、すぐイッチャいそう………♡

【※6回※ 呼吸する。

ひとつ前よりも荒くなり、ここでもさらにだんだん荒くなる。

必死で快感に耐えている】

はあ。はあ。はあ……♥

はあ、はあ、はあっ……♥

【高く、とても気持ちよさそうに喘ぐ。

気持ちいい所に擦れたので】

あっ♥

【※6回※ 少し早く呼吸する。

ひとつ前よりも荒くなり、ここでもさらにだんだん荒くなる。

必死で快感に耐えている】

はあ。はあ。はー♥

はー、はー、はーっ……♥

【低く、こらえるように、とても気持ちよさそうに喘ぐ】  
ぐっ。

【高く、こらえるように、とても気持ちよさそうに喘ぐ。

語尾が上がる】

くうっ……♥

【低く、こらえるように、とても気持ちよさそうに喘ぐ。

語尾が下がる】

あ。あ。あ。

【※3回※ ゆっくり呼吸する。

ひとつ前よりも荒くなり、ここでもさらにだんだん荒くなる。

必死で快感に耐えている】

はー……っ ♡ はーっ ♡

はー……っ ♡

【低く、うめくような声で喘ぐ。

語尾が上がる】

あっ……っ ♡

【高く、耐えるように喘ぐ。

とても危なかったが、何とか耐えたので】

くっ……っ ♡

【低く、うめくような声で喘ぐ。

語尾が上がる】

ああ……っ ♡

【※3回※ 鼻息荒く呼吸する。

必死に快感に耐える。

もうイきそうだが、やはりあまりにも早すぎるので】

ふー。ふー。ふー……♡

【うつとりと、独り言のように。

すでに理性を失いそうになっている】

いい……♡　すごいいいところ当たるう……♡

【※6回※　荒く呼吸する。

快感のとりこになり始め、必死に自分から動いて快楽をむさぼっている】

はあ、はあ、はあ。

はあ、はー、はー……♡

【低く、うめくような声で喘ぐ。

語尾が下がる】

あ。

【少し間をあけてから。

低く、うめくような声で喘ぐ。

語尾が上がる】

あ。あ♡

【低く、耐えるように喘ぐ。

またも、とても危なかったが、何とか耐えたので。

語尾が上がる】

あー……っ ♡

【※6回※ 早く、荒く呼吸する。

呼吸を整えようとする。

気持ちよすぎて、主人公を置き去りにしそうになっているのに気づいたので】

はー。はー。はーっ。

はー。はー。はーっ…… ♡

【甘えた声でたずねる。

『イエス』と聞いて安心したので。

『おまんこ擦りつけっこ』で一つの単語で『貝合わせ』という意味で言っている】

ねえ。先輩も気持ちいい？

なーとおまんこ擦（こす）りつけっこするの気持ちいい？」

〈主人公〉

「うん…… ♡ なーとするの、すっげえ気持ちいいよ…… ♡」

甘えた声で、七緒がたずねる。

己の優秀さと愛情の深さを、主人公が正しく認識しているかどうか確かめようと、質問してくる。

主人公は、こんな時の七緒が可愛くてたまらない。

今にも快感に負けそうなくせに、主人公の事ばかり気にして。

頷くとこんな風に泣きそうなほどホツとした顔をして笑うのが、可愛くて仕方ない。

● 正面 30センチ

「声が弾み、甘えた声で。

とても嬉しく、安心したので」

本当？

ふふ。嬉しい。先輩。だーい好き♡」

▲ 1 ここでSE5が一度止まる。

七緒、キスするために近づく。

● 正面 0センチ

「【※1回※ キスする。唇に軽く、音を立ててキスする】

ちゅ♡

【※5回※ キスする。

わざとちゅばちゅば音を立ててキスする。

ただ唇を重ねたり、舌を入れたりして音を立てるラブラブキス」  
んっく……ちゅ♡　ちゅ♡　ちゅ♡　ちゅっ♡」

七緒、会話するために少しだけ離れる。

### ●正面　3センチ

「うっつとりと嬉しそうに。主人公の顔を間近で見つめながら」  
はあ。先輩とセックス。ほんと気持ちいい……♡」

だから、主人公は思う。

……あー。なーって、ほんとに。ほんとに可愛いなあ。

こうしてるだけですごい胸がきゅーんてなって、何でもしてあげたくなっちゃうよ。  
だってさ。

わたしみたいな、こんな、どこにでも居るようなやつ、こんなに愛してくれて。  
人としても、作家としても。めちゃくちゃに認めてくれて、肯定してくれてさ。  
おまけに、エロい事してる時さえ、わたしの反応ばっか気にしてるんだ。

こんな可愛い子、どこにもいないよ。

少なくとも、わたしの人生には、もう絶対現れない。

『わたしにはもったいなすぎる』って今でも毎日思うけど、それ以上に『どんだけ釣り合わないと言われたって、絶対離れたくない』って思うよ。

と。

▲ 2 ここでSE5が再開する。

七緒、腰を動かすために、少し離れる。

● 正面 30センチ

「※6回※ 先ほどより少し静かに呼吸する。

うっとり、少し余裕がある。

一度腰を止めた事で、先ほどまでより少し楽になっている」

はあ。はあ。はあ。

はあ。はあ。はあ……」

〈主人公〉

「はあ、はあ、はあ……♡」

● 正面 30センチ

「少し間をあけてから。  
照れ笑いして。

とても気持ちいいが、先ほどまでよりは少し余裕がある様子で。  
とても気持ちがよくて、ついucciり目を閉じてしまっていた。

だが、それに気づいて慌てて目を開けた途端、主人公と目が合ったので」

……あ♡

ごめんなさい♡

【可愛く詫びる。

『性処理係』の役目を忘れかけて、快感に没頭していたので」

私今、先輩を気持ち良くする事だけ考えなきゃなのに。

役目忘れてました♡」

〈主人公〉

「……！」

SE 6 七緒がベッドの上で動く音

【最初から最後まで流す】

七緒、主人公の片足を持って自分の側に近づけると、主人公が身体を動かしやすいように角度を変える。

これによって、距離が少し近づく。

●正面 15センチ

「【甘々に媚びた声で。

つい役目を忘れそうになっていた事を詫びるため『性処理係ごっこセックス』らしくなるよう、思いつく限りの『普段の主人公からは程遠いセックス』を述べる。

言いながら興奮してくるが、同時に『本当にこの通りの事をされたら、自分はちゃんと拒絶せずに受け止められるだろうか』と、少し不安にもなる」

ほ、ら♡

先輩も♡ 気遣いえっちだーめ♡

先輩は今、性処理係（がかり）とセックスしてるんだから。

もっと乱暴にしなきゃダメ♡」

七緒、正面のこの距離のまま、ささやく。

★正面 ささやく 15センチ ※マークのセリフまでささやく

「『身勝手セックス』で一つの単語で『身勝手なセックス』の略」  
自分がいく事しか考えてない身勝手セックスして。

「『セックスしているのではなく、七緒の性器を使ってオナニーしているような感覚で』という意味で言っている」

なーのおまんこでオナろう？

一方的に擦り付けて、腰ねちゅねちゅ押し付けてイこう？」※

七緒、元の話し方に戻る。

●正面 15センチ

「【ひとときわ甘々に。】

『七緒の性器に、主人公のそれを強く擦り付けて、一方的に気持ちよくなれ』という意味で言っている」

ね？ ごしごし♥ ごしごし♥ ごしごし♥ ってして。

自分の一番気持ちいのしょ？」

だがここで、七緒が予想通りの事を言った。

まるでそれが当たり前のように『自分の身体を使って好きなセックスをしろ』と、主人公に迫ってきた。

お互いの関係性によっては、主人公はもしかすると『イエス』と言ったかもしれない。七緒がコスプレをするような感覚で『主人公の作品っぽいセックスをしよう』と言っているのは明白だし、その厚意に応えるために、実際はいつもと何も変わらないセックスに及ぶだけでも『うん♥』と応じたかもしれない。

だけとおそらく七緒は今、大きな誤解をしている。

『性処理係を題材にした作品を描くという事は、主人公には、自分本位なセックスをしたいという願望があるのだろう』と解釈している。

その結果『であればぜひ、自分を使って実行してほしい』と考えているのだろう。

『その願望はひとかけらもない』とは、主人公は言えない。

妄想の世界の七緒とそんなセックスした事があるのは事実だし、それが作品の基になったのも事実だ。

でも、願望があるからと言って、実行したいと思っている訳ではない。

たとえば、道路の真ん中で布団を敷いて寝てみたいとか、お店屋さんで『ここからここまで買います』と言ってみるとか。

そういった『憧れない事はないけど、実行することはまずない願望』の一つが、主人公にとっての『性処理係プレイ』なのだ。

だが、七緒に誤解を与えた主人公には責任がある。

それを解いて、本当にしたい事を伝える責任がある。

〈主人公〉

「だめっ……だ♡」

だから、主人公は言った。

息も絶え絶え。限界が迫っているのは明白。

その上『今すぐにでも思いつきクリトリスを七緒のそれに擦り付けていきたい』と考えているようにしか見えない顔で、それでも固辞した。

● 正面 15センチ

「『甘々に残念そうに。』

しかし、内心嬉しくなっている。

自分で言っておきながら、実際に乱暴な事をされたらショックを受けそうな自分が居たので」

できないの？」

主人公、こくりと深く頷く。

動いた途端汗の雫がぱたりと二筋落ち、おまけに一つは目に入ってしまった。

〈主人公〉

「だめっ、だ……♡ とにかくだめ♡

二人で気持ちいいのしかない♡

わたしは♡ なーが好きだから♡ なーの嬉しいえっちしかないっ♡」

それでも目をこすりながら、主人公は言った。

自分が一番したい事を、何とか訴えた。

● 正面 15センチ

「『甘々に残念そうに。』

しかし、内心嬉しくなっている。

自分で言っておきながら、実際に乱暴な事をされたらショックを受けそうな自分が居たので」

好きだから？

なーのおまんこ喜ばせて、一緒にいくのじゃなきゃなの？」

〈主人公〉

「そうだ……っ♡ それじゃなきゃっ……絶対ダメなんだ♡」

それを見て、七緒が困った顔で笑った。

強がりなのは誰の目にも明らかだが、それでも意地を張りたい。

そう思っている主人公を、優しく見つめてきた。

そして……。

● 正面 15センチ

「【嬉しくて笑ってしまう。】

『主人公ならそう言うだろう』という言葉が返ってきたので。

また『主人公の好きにしてほしい』と言いながら、結局この反応を期待していた自分に  
気づいたので」

ふふ♡

ふふふふふ♡」

急に愉快そうに声をあげると……主人公を抱き寄せ、キスをした。

七緒、キスするために近づく。

●正面 0センチ

「※1回※ キスする。

唇にそっと、あまり音を立てずにキスする」

ん♡」

七緒、会話するために少しだけ離れる。

●正面 3センチ

「鼻をすする。

くすくす笑いつつ、泣けてきてしまっている。

主人公の言葉が、あまりにも嬉しかったのでぐす。

「ここから※マークまで、涙ぐみながらも上機嫌で。

とても幸せな気分なので」

そうだね♡

先輩はそうだよね♡

「ここだけ『性処理係』と『係ちゃん』の二つの言葉が組み合わさる。

そのため、ここだけ『せいしよりがかりちゃん』と読む」

私がほんとに先輩の性処理係（がかり）ちゃんでも。

あの漫画と一緒に。

絶対大事にしてくれるもんね♡」※

〈主人公〉

「当たり前だろ♡ わたしはっ♡

なーが好きなんだからあっ……♡」

● 正面 3センチ

「泣き笑いして。

『主人公ならそう言うだろう』という言葉が返ってきたので。

また『主人公の好きにしてほしい』と言いながら、結局この反応を期待していた自分に気づいたので」

ふふ♡「

七緒、再びキスするために近づく。

●正面 0センチ

「【※1回※ キスする。唇に軽く、音を立ててキスする】  
ちゅ♡「

七緒、会話するために少しだけ離れる。

●正面 3センチ

「涙ぐみながら甘々に。

とても幸せな気分なので」

先輩。

好き。だ〜い好き♡

【ひとときわ甘々に誘う】

※特に聞き手をドキッとさせるセリフになるようにお願いします  
イこ。な〜と一緒にイこ♡「

〈主人公〉

「うん♡」

▲3 ここでSE5が一段階早くなる。

SE7 七緒がベッドの上で動く音2  
【最初から最後まで流す】

七緒、腰を動かすために離れる。

●正面 30センチ

「※6回※ 早く、荒く呼吸する。

すでに、すぐに絶頂しそうなほど気持ちいいので」

はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ。はあっ……♡

「※6回※ ゆっくりめに、深く呼吸する。

本当は、すでにいきそうである。

しかし、うまく絶頂するタイミングを合わせる為に、なんとか調整しようとする」

はー。はー。ふー……♡

はあ。はあ。ふーっ……♡

【※6回※ 少し早く、やや荒く呼吸する。

主人公の様子を見ながら、なんとか耐えて合わせている】

はー。はー。はー♡

はー。はーっ♡ はーっ……♡

【高く甘い声で、びくっと喘ぐ】

あ……♡

〈主人公〉

「くうっ……♡」

● 正面 30センチ

「【嬉しそうに。

主人公がイきそうなのに気づいたので】

あ……♡

七緒、会話するために少し近づく。

● 正面 15センチ

「甘々に可愛くたずねる。

主人公の余裕のない表情を見下ろしながら」  
イきそう？ 私も♡」

〈主人公〉

「うんっ……♡」

● 正面 15センチ

「うっとりため息をついて、余裕ぶる。

涙を浮かべながら頷いた主人公が、あまりにも可愛らしいので。

『くる』は『興奮する、性的にそそる』という意味」

はー。先輩のイきそうな顔、めっちゃくる♡

【うっとり】

可愛い……♡

【嬉しそうに】

主人公の反応がとにかく可愛らしいし『自分が主人公を気持ちよくさせられている』という実感が得られたので」

大好きですよ♡」

七緒、キスするために近づく。

●正面 0センチ

「【※1回※】キスする。唇に軽く、音を立ててキスする」  
ちゅ♡」

七緒、会話するために少しだけ離れる。

●正面 3センチ

「【※6回※】早く、やや荒く呼吸する。

主人公の様子を見ながら、なんとか耐えて合わせつつ『そろそろだろう』と思っている」

はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ、はあっ……♡

【独り言のように。

自分もイきそうなのを悟る」

あー……♡

【甘々に可愛く、余裕なさそうに】

もうイきそう……。

まだしてたいのにイきそう♡

【照れ笑いして。そろそろ我慢できそうにないので】  
へへ。イツていい？ 一緒にイこ？」

〈主人公〉

「うんっ……♡ 一緒だぞ♡ 絶対一緒♡」

● 正面 3センチ

「甘々に可愛く。」

主人公の言葉を嬉しそうに復唱する」

うん♡ 一緒♡ 絶対一緒♡」

七緒、腰を動かすために少し離れる。

●正面 15センチ

「【※8回※】鼻で早く、荒く、深く呼吸する。

もう全く余裕がない。それでも主人公に合わせたいと思っている」

はー、はーっ、はーっ、はー♥

はー、はーっ。はーっ。はあ……♥

【少し早口で。

甘々に、余裕なさそうに】

ああ。先輩好き。大好きです。

好き。

【※3回※】『好き』を連呼する。

少し早口で、甘々に、余裕なさそうに】

好き好き好きっ♥」

▲4 ここでSE5がさらにもう一段階早くなる。

●正面 15センチ

「【低く、小さく、耐えるように喘ぐ。

一行ごとに、少し間があく。

「どンドン押し殺すような声になる」

あ。

あ。

あ。

あっ  
♡

【※8回※ 鼻で早く、荒く、深く呼吸する。

先ほどよりも呼吸が早い。

もう全く余裕がない。それでも主人公に合わせたいと思っている】

はーふう、はーふう。

はーふう、はーふう  
♡

【低く、小さく、耐えるように喘ぐ。

一行ごとに間隔が短くなり、余裕がなくなっていく】

あ  
♡

あ  
♡

あ  
♡    あ  
♡

【とても低く、耐えるように喘ぐ。

とても間隔短く、句読点なしに喘ぐ】

※『そろそろ絶頂ポイント』と伝わるように、わかりやすくお願いします

あっあっあっあつ。

【低く、小さく、耐えるように喘ぐ。

一行ごとに間隔が短くなり、余裕がなくなる。

『もう完全に限界だ』と悟る】

あ。

あ。

あああ……♡

【低く、小さく、少し早口で。

絶頂しそうな事を、何とか伝える】

イク。イク。

【絶頂する。

低く、小さく、耐えるように、でもすぐ気持ちよさそうに喘ぐ】

※『ここが絶頂ポイント』と伝わるように、わかりやすくお願いします  
くううつ……♡「

▲5 ここでSE5がフェードアウトする。

〈主人公〉

「ああああっ……♡」

SE8 七緒がベッドの上で動く音3

【最初から最後まで流す】

七緒、少し離れる。

●正面 30センチ

「【※8回※】 かなり早く、深く、荒く呼吸する」

※『絶頂ポイントを迎えた後』と伝わるように、  
ふーはあ、ふーはあ。ふーはあ、ふーはあ。  
わかりやすくお願いします

【※7回※】 ゆっくり、深く、荒く呼吸する。  
意識してゆっくり呼吸しようとしている。

ひとつ前よりは落ち着いてくる」

ふーはー、ふーはー、ふーはー。ふー……♡」

七緒、キスするために近づく。

●正面 0センチ

「※1回※ キスする。唇に軽く、音を立ててキスする」

ちゅ♡

七緒、少し離れる。

●正面 15センチ

「少し息が苦しそうに。」

しかし、満足げに、幸せそうに。

主人公のお陰で、とても気持ちよく、幸福なセックスができたので」

はあ……♡ 結局恋人セックスしちゃいましたね♡

七緒、キスするために近づく。

●正面 0センチ

「※1回※ キスする。軽く唇にキスする」

ちゅ♡

七緒、会話するために少しだけ離れる。

●正面 3センチ

「少し息が苦しそうに。」

しかしあまあまに、嬉しそうに、うっとり。

結局今回、主人公にとっては当たり前の事を実感したので」

ねえ。先輩。

もし私が先輩の係ちゃんだったら。

幼馴染設定じゃなくても。

『係になって初めて喋った』とかでも。

絶対好きになると思いますよ♥」

〈主人公〉

「え……?」

●正面 3センチ

「少し息が苦しそうに。」

涙ぐんで、とても幸せそうに。

それだけ、今回のセックスが幸せだったので」

……だって先輩、絶対大事にしてくれるもん。

どんなにお願いしても、恋人扱いしかしてくれないもん♡

【照れ笑いして。

心底幸せそうに】

へへ。先輩。だーいすき♡

七緒、キスするために近づく。

●正面 0センチ

【※1回※ キスする。軽く唇にキスする】

ちゅ♡

ここでフェードアウトして終了。